猫又と俺　４

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫又と俺　４

【Ｎコード】
Ｎ６１０９Ｙ

【作者名】
青蛙

【あらすじ】
　おれは普通の高校一年生。何もかも普通だったのに、化け猫妖怪に居つかれたおれは普通ではいられない。
　今度の厄介事は保健の先生からもたらされた・・・・。
『猫又と俺』の続編です。

育ち盛り

「あ、あのこれ……」
「はあ」
目がくりっとしたショートカットの女の子が淡いピンクの封筒を差し出した。
――今でもラブレターとかあるんだ……。
なんてことを思ってびっくりしたのは初めの頃だけで。今じゃ見るたびに結構うんざりしている自分がいる。
おれは丘野　孝之、私立高校一年のどちらかっていうと地味な男子だ。取り立てて頭が良いわけでもない。良けりゃあ第一志望に受かってたし、ここの特別進学クラスいわゆる特進に進んでいるだろう。
運動も走るのは好きだが球技は苦手という痛いやつだ。ルックスは――それこそフツーだと思う。これぱっかりは自分ではあんまり分からない。
ただし、相当やばいなんて自覚したら朝起きれなくなるチキンハートなので「普通」は譲れない。
そんなおれが贅沢にも女子、それも結構可愛い女子からの手紙を見てなぜうんざりしているのかと言えば。
「で、林に渡せって？　それとも田口？　こういうの、自分で渡したほうがいいよ」
おれはため息まじりにその女子の手元を見た。ま、そういうことだ。この手紙はおれ宛てじゃない。それだけじゃなく、今までのすべてがおれ宛てじゃない。
愛想良くなんてできるわけがないだろっ。
「だって林君を目の前にすると何にも喋れなくなるんだもん」
涙目になって訴えられておれはたじたじとなる。こういうの苦手だ。おれがいつもつるんでる二人、林はスポーツマンタイプのイ

ケメンで、爽やかな外見で明るくて話しも面白い。　だが、すっごい助平なんだがそんなことは女子は知らない。
片や、田口は「おまえ絶対中一だろ」というくらいのベビーフェイス。　色素の薄い髪や瞳の色も相まって、コアなファンがいるらしいこの学校の幼稚舎からいるお坊ちゃまだ。
目立つ二人に挟まれた凡人なおれは、こうやって日々プライドを傷つけられている。
「渡すだけでいいから」
「お、おいっ」
可愛い女子は脱兎のごとく消えて行った。　すげー逃げっぷりに驚く暇も無い。　残された可愛い手紙がやけに眩しかった。
「モテモテだな、丘野君」
突っ立ったおれの後ろからかけられた声に、おれは相手が誰か分かったが、あえて知らんふりした。
「シカトしないで欲しいなあ」
「おれに構わないでくださいよ、笹井先生」
――うるせえよ、おまえにモテモテなんて言われたくないんだよっ。　ふざけんなよ、この狐つきめ。
まあこの悪態はひっそりと心の中で行われたわけだが……。
仕方なくのっそり振り向くと、そこにはこれまたうんざりするようなイケメンが優雅に腕を組んで立っていた。
養護担当の先生、笹井だ。　アイドルばりの容姿だがこいつは狐憑きで性質がすこぶる悪い。
関わり合いたくない相手ナンバーワンなのだ。
「そう言うなよ、ちょっと手を貸して欲しいことがあるんだけど」
「嫌です」
「まだ言ってないけど、用件」
「い、や、です」
笹井先生の頼みごとなんてろくなもんじゃない。　妖怪がらみに決まってる。　別におれはそんなことを好きでやってるわけじゃな

い。

危険なことや、面倒なことは断固お断りだ。

第一笹井先生の頼みを聞く義理も無い。　こっちがお礼して欲しいくらいだ。　この前使役している化け狐が増え過ぎて困ってる先生を結果的に助けてしまったんだから。

それにだいたいの事はその肩に乗っかってる化け狐にやれせればいい。

横を向いたおれに、ふうんと笹井先生は言いながら肩に乗った狐に何か指図する。　すると狐はぴょんと先生の肩から飛び降りてさっきの女子を追い掛けて行く。

「さっきの彼女、急いでたよね。階段とかから落ちなきゃいいけど。打ちどころ悪くて骨折とか……どう思う？」

「せんせ、卑怯だぞ」

ったく、今に始まったことじゃないが、笹井先生は性悪だ。　人間の範疇なのが可笑しいくらい妖怪寄りだとおれは思う。　はあとおれはため息をついた。

「何すればいいんですか？」

「素直な子は好きだよ」

柔らかい声で笹井先生はそう言うと「黄葉戻れ」と呟く。　するとあんなに距離があったのに黄葉と呼ばれた狐が帰って来た。

「じゃ保健室で話そうか、丘野君」

先生は女子なら失神するやつがいるんじゃないかと思うくらいの笑みを浮かべたが、相手はおれなので別に何もおこらなかった。

「気色悪い笑い方止めてもらえます？」

「あれ？　これ必殺のやつだったんだけど」

「おれ、男ですけど」

そうか、丘野には効かないかと先生はくすりと笑った。　って、今のにヤラレル男子がいるってのがすごい寒いんですけど？

保健室の外も中も前は狐がうようよいたが、今では女子がうようよいる。　おれたち、いや笹井先生を見つけた女子がきゃあきゃあ

騒いでる。
「せんせー、どこ行ってたんですかあっ。お昼休み終っちゃいますって」
黄色い声におれはぎょっとした。
「昼飯まだなのにっ」
くそっ、おれの昼飯。時計を見るともうあと五分くらいしかない。今から学食行ったところで時間切れだ。
嘘だろーっ。気づいてしまうともう腹ペコでおれは動けなくなりそうだった。
「君たち、早くクラスに戻らなきゃ。また、おいで」
にこやかに笑う先生が後ろ手にぴしゃんと保健室の戸を閉めた。
――ああこういうの、相手がすげー美人の先生だったらエロDVDみたいな展開もあるのに……と心の中でぼやいてみる。
そして……裏切り者は身の内にいた。ぐうぐう遠慮なく鳴るおれのお腹に先生はにんまりと笑う。ほんっとにやなやつだ。
「話し聞いてくれるなら、そこの引き出しにかぼちゃのパイが入っているけど」
「かぼちゃのパイ？」
どうするんだ、おれ。食いもんで釣られるもんかと思う気持ちは、先生が引き出しを開けて皿にのった上手そうなパイを見せびらかした途端に消え失せる。
許せ、おれのプライド。だってまだ育ちざかりなんだ。
「紅茶でいいかな？」
パイを口に詰め込んだまま、うんうんとおれは頷く。
「ある場所にある物を届けに行ってもらいたいんだよ」
なんでそんなにアバウトな説明なんですか、先生。それじゃあ全然説明になってません。嫌な予感しかしないが、突っ込むのは食べてからにしようとおれはパイに齧りついた。
まさか食べ物にプライドを売り渡したつけがくるなんて、善良な高校生には分からなかったんだよ、ちくしょう。

バカバカバカ

カタンと先生が自分のティーカップを皿に戻した。　ただそれだけなのに部屋の空気がぐんと変わる。
「じゃ、本題に入りますか」
「ほ、本題？」
「惚けたってダメですよ、丘野君。ここにパイ食べに来たわけじゃないでしょう？」
ソファから立ち上がろうとしたおれは先生に肩を押えられて再びソファに沈んだ。

「ただいま」
「おう、帰ったか孝之」
家に帰ったおれの足に黒猫が纏わりつく。　尻尾が二つあるこの猫、実はただの猫じゃない。
人語を喋ってる時点で普通じゃないんだが、こいつは妖怪なのだ。
化け猫妖怪、猫又という。
「なんだ、暗い顔して。腹でも痛いのか」
「別に……」
猫又相手に言い合いする気にもならず、おれは自分の部屋に入った。
「別にってなんだよ、ああ？」
いつものやくざばりの声を振り切り、ドアを閉めたはずのおれの

部屋のベッドの上に、猫又がいるのを見ておれはがっくりと項垂れた。

――何でいるんだよっ。

人間だれしも一人になりたい時ってあるよな。　今、まさにそうなんだよ。　思春期の難しいお年頃ってやつだ。　そういう香り、ぷんぷん漂わせてただろ。

そこは気を利かせるとこじゃないのかよ。　思うが猫妖怪に相手の気持ちを慮(おもんばか)れっていっても無理か。

他人同士の共同生活なんてどっちかが我慢ばかりだと上手くいかない。　たかられてるばかりのこの生活が共同生活と言えるだろうかとちらりと思う。

が、今後の事もあるし、ここははっきり言おう。

「今ちょっと話しをしたくないんだけど」

言った途端に顔面めがけて猫又の蹴りが飛んで来た。

「わ、わ、分かった。分かったから……ちょっと落ち着こうか」

ベッド横の床に倒れているおれの胸に乗っかり、前足の爪をにょっきり出している猫又に向かっておれはマジで焦っていた。

いつでも手を抜かない。　ネズミを相手にする時もゾウを相手にするときも全力でやる、そう公言しているこいつの攻撃は半端無い。

だけど学校での話をしたらもっと猫又の機嫌を損ねる気がしないでもない。

「孝之っ」

「わ、分かった。言うからそんな物騒なもん、しまって」

おれの躊躇も迫る脅威にすぐに翻る。　所詮、おれはヘタレだ、悪いかっ。

「笹井先生におつかい頼まれたんだ」

「おつかいだと?」

「う、うん」

間違いじゃ無い、頼まれたのはおつかいなんだから。

「じゃ、そのおつかいの内容を聞こうじゃないか」

「やっぱり聞く？」
言った途端に「シャアッ」と猫又が威嚇の声を上げて、おれは速攻で今日の出来事を喋っていた。
「つまり、おまえは大木の根元にあった祠の中から持っていった鏡を返して来いと言われたんだな」
「……うん」
猫又はハアと大袈裟にため息をついて見せた。猫にため息をつかれるおれって。
「場所は神社だろ」
「……そうだけど」
おれの返事に猫又の口が『バカバカバカ』と言っている。声は出ていないがそれはしっかり分かってしまった。猫の言いたいことが分るおれ。でも全然嬉しく無い。
「その大木ってのは杉か欅。いずれにしてもご神木だな。それは御霊代、または依り代とも言われている神だ。そこに収まっている鏡っていやあ……」
ああと猫又はおれの体から飛び降りた。
「魔を避けるために埋められていたその魔鏡を使ってあのくそ狐憑きが何をやったのか知らんが、孝之おまえ簡単に返してくりゃいいとでも思ってるのか？」
神社に忍び込んで鏡を元に戻す。面倒くさいことだが今晩にでも行ってこようと思っていたのに、猫又の言葉にどんどんやりたくなくなってくる。
「えと、それって危険かな」
「バカ野郎、死ぬぞ」
――死ぬ……んですか。カボチャで一つで自分の命を差し出したおれ。うっそ、冗談だろ？
「鏡で魔を跳ねのけていたくらい力が集まり易い場所だったところだぞ。鏡がどれだけ無かったのかは知らんが俺さまならそんなところには絶対寄りつかんな」

「か、神さまなんだから……人に危害なんて」
言った途端にまた猫又が『バカバカバカ』と口を動かす。
ああ、もうこんなこと分かりたくない。
「ここで言う神は仏教とかキリスト教とかそういうものの神とはまったく別のもんだ。この国は昔から自分たちの力の及ばない物を『神』として祀ってきた。当然、慈悲深いなんてことはない」
猫又が目をきゅうと細くした。
「孝之、荒ぶる神って知ってるか？」
「あ、あらぶる……」
とんでもないことに巻きこまれてしまったとおれはそのまま頭を床に打ち付けた。

殺傷石

「し、死んじゃう？」
「ご愁傷様」
ここは慰めるために嘘つけよ。　正直者なんて大嫌いだっ。
「おい、寝てる場合じゃないだろ」
柔らかい肉球がふにっとおれの顔を踏む。　確かにそうなんだけど、死ぬとか言われてやる気になれというほうが無理だろ。
こうなったらやりたいことをやり尽くし、旨いもん食いまくって死にたい。　そして辞世の句はこうだ。
「気をつけろ、暗い夜道とカボチャパイ」
つい口をついた言葉に猫又の大袈裟なため息が聞こえた。
「辞世の句のつもりか、孝之。それはな、標語だ。やっぱりおまえは底なしのバカだな。いいからパソコンを立ち上げろ。神社を調べるんだ」
猫又の言葉におれは驚いた。　だって妖怪とパソコンってなんか合わない。
「猫又ってパソコン知ってるの？　って、痛えっ」
飛び上がっておれの頭を足がかりにした猫又は、さっさと机の上に上がるとおれを見下ろした。
「俺さまをバカにするなよ。パソコンくらい知ってる」
へええ、最近の妖怪って結構ハイテクなんだ。　スマホとか操ってたら笑えるよな。　そんなことを考えていたらシャーペンの芯が手の甲に刺さった。
「うわあああああっ？」
「余裕あるじゃないか、ニタニタ笑いやがって」
「しゃ、シャーペン……えええ？」
尻尾でシャーペンを器用に巻きつけているのはいいが使い方が違うと言いたい。　たかがシャーペンの芯とはいえ、手の甲にめり込

むと切ないほど痛い。
「痛いんだぞ」
「知ってる」
――そーかよ。
いててと言いながらパソコンを立ち上げると、好きなゲームのキャラクターの三頭身イラストが画面に現れた。
へっという猫又の声を聞いたような気がするがもう無視するしかない。
「堅州国(かたすくに)神社……ってここだ。あったよ」
小さい神社らしく地図に印しかない。遠くだとやだなあと思っていたが案外近い。これなら自転車で三十分くらいで行けそうだ。
中学生や、高校生男子にとって足と言えば自転車だ。二時間以内なら自転車の行動範囲内といえる。
だが、ほっとした俺をよそに、名前を聞いた猫又の様子は違った。
「堅州国って言ったよな」
ううむと机に置いてあるパソコンの前で佇む猫……不思議な絵面だ。
「堅州国(かたすくに)ってのは根の堅州国からきてる。それは黄泉のことだ。そして神木の根元の小さなお祠の中にあるのはおそらく殺傷石だ」
「さっしょうせき？」
「ああ……その力を封じ込める目的でその鏡を上に置いていたのかもな」
それで？
そういった顔をおれは猫又に見せていたのだろう。無言のおれに猫又は呆れたような仕草を見せた。
「今の聞こえてたか、孝之」
「聞こえてたけど、さっしょうせきの意味分かんねえ」
「そーか」
猫又がごろんと横になった。尻尾がふりふりと揺れている。
もしかしてもうどうでもいいやとか思ったのか？

「なあ、教えてくんないの？」
「知ってどうする？　ますます行きたくなくなるぞ」
猫又に言われておれは椅子にがたんと座り込んだ。　頭をわしゃわしゃかき混ぜてみたりしたけど何か良い案がぽっと浮ぶ――なんて事は無かった。　あるはずない、そんなことできるんなら定期テストで毎回悩まない。
「あんたって子は、返ってきたテストを親に見せる前に何で今回の敗因は、とか言うのよっ」
予防線張ったつもりが、張ってることで怒られてしまった……って、今何考えていたんだっけ？
ああ……鏡だったよな。
――行きたくない。行かなくていい？　だってあの女子を知っているわけじゃないし。　酷い事っていったって、まさか死ぬなんてことはないだろう？　笹井先生だって人殺しまではしないよな。
だったらおればっかり命かけるのってどうなんだ？　知らんふりしたっていいだろ。
「あああああっ、おれってなんてひとでなしなんだあっ」
叫んだところでどうにもなりはしない。　そんな事分かってるけど叫ばずにはいられなかった。
だってやっぱり怖いじゃないか。　笹井先生が誰かに行かせようとしたのはこういうことだったのか。　単なるおつかいだと思ってたおれは猫又の言う通り、本当にバカだ。
それでも自分の身を守るために他人を見殺しにする冷徹さもおれには無い。　どっちにも行けず、その場でおろおろしているだけ。
項垂れるおれの横で猫又が何か言った。
「……ってことだよな」
「は？　何？」
転がっていた猫又が勢いよく起き上がる。
「この殺傷石は妖怪のなれの果てだ。ってことはだ。鏡の無い今、そいつは人に害を与えている」

「ま、まあ……」

あんなちっぽけな神社にそうそう人は行かないだろうけど、近づけば何かと障りがあるのは間違いないだろう。

「よっ」と声を上げた猫又が机の上から綺麗な弧を描いて飛び降りた。　で、やけに楽しそうな声が部屋に響く。

「って、ことは……この美少女妖怪、猫又さまに任せろ」

猫又はいない

――やっぱ、それですか……。

「石、やっつけるのかよ？」

「もちろん」

そこには、目付きの鋭い花柄のワンピース姿バージョンの猫妖怪が腰に手を当てて大きく足を開いて立っている。

「そんな曰くつきの妖怪を退治してみろ。どんだけ徳を積めると思うんだ。ここは俺さまが、その石に隠れてやがる妖怪をぶっ殺してやる」

――猫又がやる気になったのって、そこ？

ふんっと大きく息を鼻から出した猫又に若干がっかりしたおれだった。　いや、純粋におれを助けたいと思って……とは思わなかったけどさ、ここは少し嘘でもいいからそんな事を言って欲しかった。

「おい、何たそがれてるんだ、孝之。あの狐憑きから預かった物を持って来い」

「うん」

預かった文箱は漆塗りで思ったより軽い。　上の箱との境に札が貼ってあった。　これを剥がせばいいのか？

「孝之、止め……」

びりっと破った途端に勝手に上の箱が飛んで白っぽい光が目を焼いた。

「うわああっ」

あまりの痛さに暫く目が開けられない。

目を怪我した？　どきどきしながら薄目を開けるとちかちかはするが何ともなってない。　思わず胸を押えて猫又はどうなったのかと探すが猫又の姿はどこにも無かった。　六畳の部屋だ、そんなに死角があるはずも無い。

「猫又？　どこ？」

椅子の下やベッドの上、クローゼットの中。　ともかくどこにも猫又はいない。

「なんなんだよ。俺さまに任せろなんて言ったくせに」

何が何だか分からないまま、おれは一人になってしまった。　がっくりとその場に座り込んで、何の気なしに箱に収まっている鏡を取り上げてみる。

燻された鈍い光を放つ銀色の手鏡。　おそらくそんなに古いものじゃない。　それにどんな力があるのかおれには分からなかった。

だって、

だって教えてくれるはずの猫又がいない。

「おれ一人で行けっていうのかよ」

おれの文句に誰の答えもツッコミもない。　一人になったと思い知らされて一人ひっそりと落ち込んだ。

それでもおれは、

おれは行かなきゃ。

ため息を何回もついた。　そこら中壁や椅子やドアを蹴って、大声を上げまくった。　そんなことしたって何も変わらない。　知っているけど止まらなかった。　ひっくり返った部屋を眺めておれは納得したかったんだと思う。

どこかでいつも猫又をあてにしていた。　助けてもらえること前提で。　今回のことだってバックボーンに猫又がいるから受けたようなもんだ。

後ろだて――そんなもん、あっという間に無くなるんだ、今みたいに。

「行くか」

鏡をおれは斜め掛けした鞄の中に押し込み、自転車の鍵を引き出しから取り出した。　懐中電灯を探し当ててカーゴパンツのポケットに突っ込んだ。

めちゃくちゃ行きたくないけど。　誰かが止めていいと言ってくれたら速攻止める。　そんな思いで……それでもおれは家を出た。

携帯に入れた地図を頼りに自転車を漕ぐとあっと言う間に神社に着く。　こんなに近くにあるのにおれはまったく知らなかった。

まあ、目の前にあったとしても見えて無かったかも。　それほどおれには縁遠い場所だった。　鎮守の森と言えば聞こえはいいが、なんだかただの造成途中でほったらかしになっているだけみたいな雑木林が続く。

脇に自転車を立て懸けて上着のポケットを探る。　懐中電灯を取り出してスイッチを入れると、そこだけ丸く切り取ったかのように明るくなった。　小さい神社だと思っていたが歩いていくと結構奥深い。　足元の石が歩くたびに大きな音を立てて、ここに侵入者がいると教えているようだった。

ざくざく……ざくざく……もうどう足を動かしても音が鳴る。

「くそっ」

もうやけくそ気味におれは走った。　足元の石が弾け飛んで木の幹に当たって落ちる。　急に走ったせいかなんだか気持ちが悪くなってきておれは立ち止って胸を押えた。

おれってどこまでもヒーローになれないやつだ。　現場に行く前に疲れ果ててるってどんだけ運動不足なんだよ。

「き、気持ちわる……」

膝に手を置いて顔を上げると、何かがおかしいことに気づく。今日は満月だ。　周りに照明がまったくないとはいえ、こんなに墨を溶かしたみたいに都会の夜が何も見えないっておかしくないか？

真っ暗という言葉の次に来るような闇に見覚えがある。

漆黒の闇――去年の夏、確かにおれは同じ闇の中にいた。　思い出したら腕からゾワリと寒気がうなじへそれ自体が生きもののように這い上がってくる。

似ている。　闇の気質……そんなものがあるとしたら、これこそがそうだ。　明らかに悪意を含んでいる暗闇。

お母さんの教え

「だいぶ大きく膨らんだようだな」
「ぎえええっ？」
後ろから急に声をかけられておれは飛び上がった。　いるよな、こんなやつ。　怖い話をしてるときにビビらそうとして急に大声を出すやつ。
そして、まんまと俺はビビったよ、マジで。
「猫又っ」
怖かったやら、今までどこ行ってたんだとか。　言いたいことが互いに優先順位を争って、もうおれの頭はぐちゃぐちゃだ。
嬉しいんだかむかついてるんだか……きっと両方だ。
「おまえなあっ」
そう言って振り返ったおれに、ガコンと猫又のげんこつが頭に入る。　今の猫又は人型でお馴染の目付きの鋭い女子姿だ。
な、なんで？
「でかい声出すんじゃない。おまえどんだけ場数を踏んでも学習しないんだな。そんなんだから『すべりどめ』に行くんだよ」
「うっ……」
再会に内心嬉しかったおれの笑顔も凍る言葉をさらっと猫又は言い放った。　こっちはいなくなってしまってどんなに心配したか。
文句の一つも言ってやろうと再び口を開く前に猫又がおれの鞄をバンと叩いた。
「あの物騒なもんはまだ鞄の中にしまっておけよ。不用意に出すもんだから相当飛ばされたじゃないか、このバカ」
「お、おれ？」
「そーだよ、おまえだ、孝之。帰ってくるのに往生したぜ」
憎々しげにそう言うとふんと猫又は鼻を鳴らす。
「ご、ごめん。で、どこまで飛んでったの？」

隣町？　まさか違う県とかじゃないよな。　でもこんなに怒ってるんだから……いや、ちょっと待て。　猫又っていつもこんなスタンスだよな、騙されるなおれ。　逡巡するおれの口の端をぎゅむっと捻りあげて猫又が答えた。

「ちっ、地獄の釜近くまで飛ばされたんだよ。煮えたぎる血に落ちるかと思ったんだからな」

なぬ～っ？

「ほ、ほんと？」

「嘘ついてどうするんだよ、ああ？」

いやもう、なんでこんなに凄味があるのか分らないし、どうやったらそんなとこまで飛ぶのかも謎なんだが、相当ヤバかったらしいのは分かる。

「俺さまは成仏して極楽に行きたいんだ。なんで地獄に行かなきゃなんないんだよっ」

「いや、それはやっぱり神様は良く見てるから……」

言わなきゃいいのについ言ってしまうおれは真正のバカだ。　妖怪殺しまくってる猫又が極楽に行けるわけなんて無いんじゃないか。

つーか、極楽って本当にあるの？　そう思ってしまったのがつい、口に出てしまったのだ。

「ぐわあああああっ」

肉食獣の咆哮のような声が聞こえ、殴りかかって来た猫又の手がおれの頭上で止まる。

助かったと一瞬思ったが、危機は去ったんじゃなくて別口になっただけだと即座に気づいた。　いや、もっと悪い。

「何今の？」

「殺生石に閉じ込められていた何かが本格的に目を覚ましたのかもな」

あっさりと猫又が応えて声がする方を見据えた。　見るからに嬉しそうな顔で、きっと猫姿だったら毛が興奮で逆立っていると思う。

「行くぞ、孝之」

「あ、うん」
横目で見た猫又の舌がぺろりと自分の上唇を舐める。
「た、楽しんでないだろうな」
「バカ野郎、楽しいわけないだろ」
猫又はそう言うけど、スカートから飛び出した二本の尻尾がふるふると揺れているから思ってることなんかダダ洩れだ。
――すっげー楽しいんじゃねえかよっ。
「これって悪霊かな？」
去年の夏に見た――そう言おうとしておれは言葉を飲み込んだ。
その悪霊が猫又の元飼い主で、そいつのせいで猫又が妖怪になった……と思い出したから。
悪霊と成果てた飼い主を猫又は優しい人だったと――そう言っていた。簡単に割り切れるわけはない、そう思うと口にできない。
口ごもるおれにふんと猫又は鼻を鳴らし、二、三度大きく頭を振った。おまけに足元の石を蹴とばした後、不貞腐れ気味に口を開いた。
「そうだ、おれさまの飼い主と同じ腐った悪霊だ」
「え？」
「そう言って欲しかったんだろ。なんで俺さまがおまえの気持ちを斟酌しなきゃならないんだ」
苛々すると猫又は大きく舌打ちをした。
「なあ、猫又……ごめ……」
「うるさいっ」
おれの言葉は猫又の声と実力行使によって遮られた。どすんと鳩尾に一発くらっておれは膝が折れて蹲る。
「……いってぇ……なにすんだよ」
「それ以上、気色の悪いこと言うなよっていうお願いだ」
――お願いだと？
猫又め、お願いするときは手を出すなってお母さんに教わらなかったのかよ。

ねばねばの正体

「うわああっ」

黒いねばねばした触手がおれの足に絡んできたのだ。　急いで払い除けると手にぬめっとしたものがべったりとついた。

「ぎゃあ、気色悪っ、来るな、来るなっ」

腐りかけた蜘蛛の巣みたいな……もちろん、蜘蛛の巣が腐らないことくらい知ってるけど。　例えればそんな感じのねばねばだ。

「く、蜘蛛みたいだよな」

「蜘蛛？　どっちかっていうと触手は蛸っていう……いや、蜘蛛か。そうかもしれん」

猫又は顎に手をやってふんふんと考え込んでいる。　その間にも黒っぽい触手があちこちから伸びて来ておれたちは触手の群れに囲まれていた。

「ど、どうするんだよ。囲まれちゃったじゃないか」

別に猫又のせいじゃないんだけど、誰かにおっ被せてしまわないと泣きだしそうだ。

「この触手を操ってる本体をやっつければいいんだ。俺さまの前に出ろ、孝之」

腕を掴まれたおれは猫又に押し出されるように前に行かされる。

何で？　おれを生贄にしてその隙に本体を狙う作戦？　って、おれに一言の相談も了解もないってさ……そんなの。

「やだっ、猫又がそれで妖しをやっつけられるとしたって、おれが犠牲になるのなんか納得できないっ」

別に一人無事でいたいなんて思ってるわけじゃない。　一緒に立ち向かうならやられてもいいんだ。　でもこんなの……そう思っておれは猫又の後ろ側に回ろうとした。

「動くな、ボケ」

「いてっ」

途端に猫又の蹴りが横腹に決まる。
「何訳の分らんことぐだぐだ言ってるんだ。早く鞄から鏡出してやつらに向けろ、バカ」
――あ、そういうこと？
鏡は妖しに効く。　だから、猫又はおれの後ろに回らないといけないのだ。　言われて気づいておれは頭をがりがり掻いた。
「鏡のことすっかり忘れてた」
「おまえ……ここに一体何しに来たんだ？」
ううう、ごもっとも。
鞄を手探りで探す。　目を逸らすなんてとても怖くてできない。
大きくもない鞄の中に確かに鏡はあるはずなのに手に触れるのは懐中電灯とか、ハンカチにテッシュやらお財布とか。　お育ちが良いのが丸分りだ。　くそっ、なんだって定期なんて持って来たのかと自分に腹が立つ。
「早くしろっ、孝之」
後ろから罵声が飛ぶが、こっちだって早く出したいに決まってる。焦ってる時に高圧的にされるともっと焦るって知ってるんだろうか？
足元から這い上ってくるゼリー状のものがもう気持ち悪くて堪らない。　顔にべちゃっと覆い被さるように触手がへばりついてきた頃ようやく硬い手触りとおれは巡り合えた。
会いたかったよ、ベイビー。
「これでも喰らえっ」
鞄から出して両手で突き出すように構える。　と、ぐわんと空間が歪むような感覚と共に白く眩しい光が目を焼いた。
――そうだった、これって痛いんだった。　火を当てられた蛭のようにじゅっという音させてぼとぼとと腕や足から触手が落ちていく。
最後に顔を覆っていたぬるぬるもべたりと地面に堕ちて崩れる。
おれたちを囲んでいた円がぞぞぞっと広がった。
「こ、これってさ」

――な、なんかおれ……いけるんじゃねえ？

この鏡さえ持っていればこいつらを恐れる理由などない。　っていうか、妖しには無敵ってことじゃないの？

おれって無敵なんだ。

こんな気分の良いことが最近あっただろうか？　生まれてこのかた、こんなにおれがヒーローだったことなんて一回も。　猫又だってておれを頼ってるじゃん。

――誰かおれのこと見て無いかな。　林とか、田口とか。

「って、なに言ってるんだ、おれ。見られるなんてマジＮＧに決まってるじゃん」

これから始まるおれの活躍は人知れず行われる……んだよな、うん。　俺の善行はきっと神様が見ている……よね？

「このまま突っ走るぞ。ついて来いよ、猫又」

おれの後ろで「ちっ」という音が聞こえてきたがおれは寛大にも聞こえないふりをしてやった。　自信がつくと余裕が生まれる、そういうことだ。

おバカにも自分が強くなったと思い込んでしまった。　まあ、今までそんな経験が無いんだからしょうがない――っていうのも後で思うことだ。

「うおおおりゃああ」

手鏡をかざしながら爆走する男子高校生。　一般の人が見ちゃったらかなりヤバイが、ここはさらっと流して欲しい。　だって今は妖怪相手という非常時だ。

下がって行く触手のスピードを超えておれは闇の中に突っ込んでいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6109y/

猫又と俺　４

2011年11月27日15時54分発行